

移動するインドネシア華人のアイデンティティと ホスト社会との関わり

The Identity and the Relationship with Host-society of Migrant Chinese Indonesians

中谷 潤子（NAKATANI Junko）

本研究は、移動するインドネシア華人が移動先のホスト社会との関わりにおいて自らのアイデンティティの再構築を行う様について明らかにすることを目的としたものである。

これまで、2014年には首都ジャカルタ、2015年には第二の都市スラバヤ、そして移動先である香港や台湾、日本などにおいて多くのインタビューを行ってきた。その中で、特に親の世代に香港や台湾に移動してきた二世に注目し、第二世代に照準を当てた調査を行おうと試みた。しかし、香港ではインタビューを行うことができたが、その後インタビューを受けてくれる対象者を見つけることが非常に困難で、調査は順調に進まなかった。

一方で、個人研究として日本国内で看護師・介護士として働くことにチャレンジするEPA候補生に対する調査も継続して行ってきた。EPA候補生には華人は多くはないが、華人以外も含めて移動するインドネシア人ということで、ホスト社会とのかかわりの中、自分をどうとらえるか、自分の人生をどう設計するかに向き合っているさまがみえてきた。

そこで、対象を華人以外にも広げ、「移動するインドネシア人のアイデンティティとホスト社会との関わり」として、昨年度から継続した調査を行い、データを収集している。現在、海外で働くインドネシア人は30万人を超える。日本にも前述のEPA候補生のほか技能実習生が数多い。そのほか、香港やシンガポールで家事労働者として、そして台湾では介護従事者として女性労働者が多いことも特徴としてあげられる。

2016年度は、インドネシア東ジャワ州で海外労働経験者にインタビューすることができた。地元では就職が困難な中、何年も海外で働いた後、帰国し、どのようにその後の人生を設計しようとしているのか非常に興味深い話が聞けた。単なる出稼ぎとして海外に出、そこで何を、そこででの経験をどうつなげるのか。今年度も引き続き調査を行う予定である。